

レビ記24章「御名の栄光への奉仕」

1A 不断の奉仕 1-9

1B 燭台のともし火 1-4

2B 臨在のパン 5-9

2A 御名の冒瀆 10-23

1B エジプト人の父 10-16

2B 殺す罪 17-23

本文

レビ記 24 章を開いてください。私たちは 23 章を、二回に渡って、七つの例祭について見てきました。例年行われる、収穫に基づく祭りです。それが聖なる会合であると言われます。そして次回、25 章においては、土地を休ませる安息年について、また五十年に一度訪れるヨベルの年について見て行きます。そこには、神の贖いについての壮大なご計画があることを見て行きます。七つの例祭もまた、キリストによる贖いのご計画について示されていました。

1A 不断の奉仕 1-9

1B 燭台のともし火 1-4

その合間に、日々行わなければいけない、聖所における祭司の奉仕について、主が命じておられます。2 節に、「イスラエルの子らに命じて」とありますね。1-2 節を読んでみましょう。

¹ 主はモーセにこう告げられた。²「あなたはイスラエルの子らに命じて、ともしび用の、質の良い純粋なオリーブ油を持って来させなさい。ともしびを絶えずともしておくためである。

祭司が、ともしびを絶えず灯していきますが、その油を携えるのはイスラエルの子らです。主は、彼らに対して七つの祭りという、大きな会合を持つように教えられました。しかし、その会合の間も、いつでも絶えず、主に対するともしびを灯していくことが命じられています。それは、ちょうど、日本全国がお祭りのような大きな行事を執り行ったとしても、電力会社は絶えず電気を使用できるように働いているのと同じです。食品のような日常に必要なものを売っているお店が開いているのと同じです。病院で入院している患者さんを、絶えず看ている看護師さんやお医者さんがいるのと同じです。主に対する、霊的な務め、ともしびを灯していくのは、絶えず行わなければならない、それが祭りという盛大な出来事においても、絶やしてはいけないということです。

出エジプト記で、主の幕屋の用具を造りなさいという命令があります。その仕事をするために、主の霊に満たされた知恵ある者たちを、主は名指しで召されました。しかし、その命令の後に、安

息なさいという命令があります。「出 31:14 あなたがたは、この安息を守らなければならない。これは、あなたがたにとって聖なるものだからである。これを汚す者は必ず殺されなければならない。この安息中に仕事をする者はだれでも、自分の民の間から断ち切られる。」主の働きをしているのに、主の命令を背いてしまっては本末転倒です。元も子もありません。けれども、いとも簡単に過ちを犯してしまいます。主への働きをしているので、それはすべて正当化されるのだとして、主の命じられた安息を破ってしまうことです。

同じように、主はご自身の前でともしびを灯していなさいと命じておられるのに、それを主への祭りで、祭司たちが火による献げ物で忙しくしていて、絶えず灯していないといけないという務めを、ないがしろにしてしまう可能性があります。したがって、主はここでいつもの奉仕を絶やすことのないように命じておられます。そして、それが霊的には、生命線なのです。

³アロンは会見の天幕の中、あかしの箱の垂れ幕の外側で、夕方から朝まで主の前に絶えずそのともしびを整えておく。これはあなたがたが代々守るべき永遠の掟である。⁴彼はきよい燭台の上に、そのともしびを主の前に絶えず整えておく。

私たちは出エジプト記で、じっくりとこの燭台と、また火をとますために用いられる良質な油について学びました。それは、東の入口から入って、幕屋の聖所に入ると見えます。聖所は、二つの区分があります。金で覆われた板に幕をかけたのが、聖所であります。その中に入ると、右側には、臨在のパンの机があります。そして左側に、純金でできた燭台があります。アーモンドの木の枝を模しています。七つの枝があり、その先にともし火皿があります。正面に香を焚くための、香壇があります。香壇の真後ろに垂れ幕があるのです。聖所の中にさらに仕切りがあり、その奥に、あかしの箱とその上に、宥めの蓋が覆っています。至聖所と呼びます。その宥めの蓋には、二つのケルビムが純金で掘られていて、互いに翼で覆っている形です。これは、主ご自身の御座にケルビムが仕えている姿です。主は、そのケルビムの間から語られると宣言されました。

その至聖所は、主がご臨在されるためそこは光っています。しかし、垂れ幕の外側には光は一切ありません。そこを照らすのが燭台です。光がなければ、すべてが暗闇となり、祭司は奉仕することができません。しかし、主が御座におられるところには、光は必ずあるのです。絶えずあります。したがって、油が絶えることがないように、絶えずイスラエルの子らが油を携えてこなければいけないのです。

これを霊的に受け継いでいるのが、私たちキリスト者です。神は闇の中で、光よあれ、と言われて、それで光が造られました。同じように、キリストにある神の栄光があって、それで闇の中でも光る者となったのです。「Ⅱコリ 4:6 「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。」キリストご

自身が光であられ、私たちの心が絶えず、この方の光に照らされている必要がある、ということですから。同じコリント第二には、「3:18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」とあります。御霊によって、主の光を反映させて、私たち自身も主の光を輝かせて歩むのです。

そのために必要なのは、日ごとの主との交わりです。光であられるイエス様に目を留めることですから。私たちの目が、からだ全体を明るくさせるということ、イエス様は言われました。私たちが主を見つめる時を日ごとに持つからこそ、私たちは肉眼で見える世界がすべてではなく、むしろ、神の国があり、御国が到来することを御霊によって知るのです。

ところで燭台については、ゼカリヤ書 4 章で、七つのともし火皿に管があって、オリーブの木から油が直接、供給されている幻がありますが、そこで、主が、「ゼカ 4:6 彼は私にこう答えた。「これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は言われる。」油は、主の御霊を示しています。

2B 臨在のパン 5-9

もう一つ、祭司たちが欠かすことのできない奉仕があります。パンの供え物です。

⁵ あなたは小麦粉を取り、それで輪形パン十二個を焼く。一つの輪形パンは十分の二エパである。
⁶ それを主の前のきよい机の上に一列六つずつ、二列に置く。⁷ それぞれの列に純粋な乳香を添え、覚えの分のパンとし、主への食物のささげ物とする。

先ほど話しましたように、聖所の入口から入りますと、右側、つまり北側に、臨在のパンの机があります。主がご臨在されるという意味の臨在です。そこに置くのは、十二個の輪形のパンです。それを、一列に六つずつ、二列に置きます。それは、何のためか？「覚えの分のパンとし、主への食物のささげ物」ということです。十二個が、イスラエルの十二部族であることは言うまでもありません。イスラエルの子らが、主の前で覚えられるための供え物なのです。

似たような働きをするものが、祭司の装束にありましたね。祭司の肩当てと、胸当てです。まず、肩当てについて、長いですが出エジプト記 28 章 7 節から 12 節まで読みます。

7 二つの肩当てが、それぞれエポデの両端に付けられ、エポデは一つに結ばれる。8 エポデの上に来るあや織りの帯はエポデと同じ作りで、金色、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用い、エポデの一部となるようにする。9 二つの縞めのうを取り、その上にイスラエルの息子たちの名を刻む。10 六つの名を一つの石に、残りの六つの名をもう一つの石に、

生まれた順に刻む。11 印章を彫る宝石細工を施して、イスラエルの息子たちの名をその二つの石に彫り、それぞれを金縁の細工の中にはめ込む。12 その二つの石をエポデの肩当てに付け、イスラエルの息子たちが覚えられるための石とする。アロンは【主】の前で、彼らの名が覚えられるように両肩に載せる。

これと同じように、胸当てにも十二の宝石が埋め込まれます。「出 28:21 これらの宝石はイスラエルの息子たちの名にちなむもので、彼らの名にしたがい十二個でなければならない。それらは印章のように、それぞれに名が彫られ、十二部族を表す。」大祭司の心にはいつも、イスラエルの名を覚えているということです。そして主に対して執り成しているのです。

このように、祭司が自分の肩にイスラエルの名を背負い、自分の胸にイスラエルの名を覚えていきます。祭司が、このようにイスラエルを愛し、重荷を負うのです。私たちは、互いに重荷を担い合うことを命じられていますね。「ガラ 6:2 互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。」

そのパンに置くのは「純粋な乳香」です。乳香は、樹木の樹皮に傷をつけて、その時に分泌されるから樹脂を固めたものです。乳白色をしているので、乳香と呼ばれます。北アフリカや中東地域で生産されています。今でもその地域は、部屋全体に乳香の香りでいっぱいにして、リラックスして、アラビック・コーヒーを楽しむなどで使われています。甘酸っぱい香りがします。グミのように、弾力性もあり、食べることもできます。この乳香は、没薬と共に、遺体の埋葬の臭い消しにも使われます。東方からの博士、賢人が幼いイエス様に贈り物を献げた中にも乳香がありました。

これをパンの上に置くとは、どういうことでしょうか？イスラエルを示しているそのパンが、祈りによって主に覚えられるようにするためです。「詩 141:2 私の祈りが御前への香として手を上げる祈りがタベのささげ物として立ち上りますように。」そして、バプテスマのヨハネの父になるザカリヤが、聖所で香を焚いている時に、香壇のところにお使いがガブリエルが立っていました。彼はザカリヤに伝えます。「恐れることはありません。ザカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです。(ルカ 1:13)」祈りや願いを、その香は示しているのです。そして黙示録は、天における香が、「聖徒たちの祈り」であると断言しています(5:8)。

つまり、私たちが、絶やしてはいけないことは祈りです。主の前に人々を覚えて、祈るのです。私たちの前にいろいろな良きことがあります。主に対する働きがあります。今週末から、私たちは合同修養会もあります。それらの用意の時に忘れてはならないのは祈りです。主に、私たちが覚えていただくのです。

⁸ 彼は安息日ごとに、これを主の前に絶えず整えておく。これはイスラエルの子らによるささげ物で

あって、永遠の契約である。

このパンであります、安息日毎に取り替えます。その取り替えた後のパンを、祭司が食べます。七つの祭りは、安息日と密接につながっていますが、その時にパンを取り替えるのは忘れてはならないのです。私たち自身が、主にある安息を得て、主の前に出て行くことを思います。これらのことを、どんなことが起こっていても、行います。

⁹ これはアロンとその子らのものとなり、彼らはこれを聖なる所で食べる。これは最も聖なるものであり、主への食物のささげ物のうちから、永遠の定めにより彼に与えられた割り当てだからである。」

聖所でのパンを祭司が聖所の中で食べるのは、最も聖なることです。これは、ただ食べることでなく、まさに主ご自身の恵みをいただき、この方と交わることを示しています。主ご自身のからだにあずかるために、パンを裂いて受け取る聖餐式も、同じ考えです。

これが、永遠に定めによるものだとありますが、いつまでも行うものであると定めています。私たちも、主が来られるまで主の死を告げ知らせるとあるように、たとえ二千年前の出来事であっても、それでも覚えるのです。なぜなら、主は昔も今も、これからも変わることなく、その流された血と裂かれたからだは、今の私たちに有効だからです。

ところで、この、週ごとに変わるパンについて、ダビデがサウルから逃げた時の話が有名です。サウルが自分を殺すことがはっきりとした時、彼は逃亡を始めますが、ノブという祭司の町に、当時は幕屋がありました。そこで、彼は自分と若者のための食べ物を祭司アヒメレクに求めました。普通のパンがなかったので、アヒメレクは聖別されたパンがちょうどありました。本来なら、それは祭司のみが食べることができます。しかし、神の憐れみはそうした人々の基本的な必要、事欠いている時に行う良い行いを退けるものではありません。

そこで、イエス様が、安息日に弟子たちが畑の麦の穂を取って食べているのを、咎めたパリサイ派の者たちに、このダビデの話をお出しになったのです。「マル 2:25-26 ダビデと供の者たちが食べ物がないとき、ダビデが何をしたら、読んだことがないのですか。大祭司エブヤタルのころ、どのようにして、ダビデが神の家に入り、祭司以外の方が食べてはならない臨在のパンを食べて、一緒にいた人たちにも与えたか、読んだことがないのですか。」律法には、愛がその基になっており、その原則の中で、一定の柔軟性があったということです。

2A 御名の冒瀆 10-23

次に、また一見、関わりがないような事件をモーセは取り上げています。御名を冒瀆する者が、

イスラエルの中に現れた、ということです。けれども、決して関わりがないのではありません。主の祭司が、燭台に光をともし、聖なるパンを取り替えて、それを食べるというのは、すべて、主の御名をあがめるためです。その御名を真っ向から否定しているのですから、大問題なのです。

イエス・キリストの教会に、イエス・キリストを否定する者が現れたらどうなるでしょうか？ 教会が教会でなくなってしまうですね。けれども、事実、この方を否定するように仕向ける者たちが教会に忍び込むことの危険性を、ユダは手紙で唱えています。「ユダ 1:4 それは、ある者たちが忍び込んできたからです。彼らは不敬虔な者たちで、私たちの神の恵みを放縦に変え、唯一の支配者であり私たちの主であるイエス・キリストを否定しているので、以下のようなさばきにあうと昔から記されています。」

1B エジプト人の父 10-16

¹⁰ さて、イスラエル人を母とし、エジプト人を父とする者がイスラエルの子らのうちに出たが、このイスラエルの女の息子と、あるイスラエル人とが宿営の中で争った。¹¹ そのとき、イスラエルの女の息子が御名を汚し、ののしったので、人々はこの者をモーセのところに連れて行った。彼の母の名はシエロミテで、ダン部族のディブリの娘であった。

背景は、イスラエル人と、父がエジプト人の息子が争った中で、御名を汚して、罵ったということです。この背景がとても大事で、後に民数記で、荒野の旅を再開している時に、民の間に不平を鳴らす大きな罪がありました。「民 11:4-6 彼らのうちに混じって来ていた者たちは激しい欲望にかられ、イスラエルの子らは再び大声で泣いて、言った。「ああ、肉が食べたい。エジプトで、ただで魚を食べていたことを思い出す。きゅうりも、すいか、にら、玉ねぎ、にんにくも。だが今や、私たちの喉はからからだ。全く何もなく、ただ、このマナを見るだけだ。』」

ここの「混じって来ていた者」というのが、エジプトにいたイスラエル人ではない他の民です。主がイスラエルをエジプトから解放し、そこから出て来た時に、必ずしも信仰の応答として出て来たのではなく、物理的に、政治的に解放されることを願って、便乗して出てきました。ところが、出てきたら、そこは何もなかったのです。自由は手にしても、他に手にしているのは、ただ主とそこにご臨在だけなのです。イエス様が、「わたしはいのちのパンです。」と言われたら、多くの群衆が去りましたが、主ご自身しか生きる術がないのです。しかし、主がおられたら、すべてを得ているのです。この方が導き、食物を与え、守られるのです。純粋に信仰による旅なのに、そこに信仰とは関係のない人がいれば、物理的には一緒にいても、必ずこのような問題を引き起こします。

その前触れとも言えるのが、この事件です。彼は確かにイスラエル人の母がいましたが、父がエジプト人であります。彼は、母の信じている神を受け入れず、拒みました。それなのに、一緒に来ていたのです。私たちが、イエスを主として、キリストをかしらとするからだに属しているのに、信じ

ておらず、御霊を持っていない者たちがいたら、それはそのまま分裂をもたらします。先ほど引用した、イエス・キリストを否定する者たちが教会に忍び込んだとユダの手紙を引用しましたが、19節に、「この人たちは、分裂を引き起こす、生まれつきのままの人間で、御霊を持っていません。」とユダは言っています。

¹² 人々は主の命が彼らにはっきりと示されるまで、この者を留置しておいた。

これは、とても正しい姿勢ですね。彼らは、怒りの感情を彼らにぶつけるのではなく、主ご自身の正しい裁き、その指示を待つというのは正しい姿勢です。教会でも、罪を犯し、悔い改めない者に対して、私たちは非常に慎重に内部で裁かなければいけないことを教えています。罪を犯していると告発された長老について、パウロがテモテに次のように指導しています。「I テモ 5:19-21 長老に対する訴えは、二人か三人の証人がいなければ、受理してはいけません。罪を犯している者をすべての人の前で責めなさい。そうすれば、ほかの人たちも恐れを抱くでしょう。私は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使いたちの前で、あなたに厳かに命じます。これらのことを先入観なしに守り、何事もえこひいきせずに行いなさい。」主の前で行うのですから、先入観なしに、えこひいきせずに行うのです。

¹³ 主はモーセにこう告げられた。¹⁴「あの、ののしった者を宿営の外に連れ出し、それを聞いたすべての人がその人の頭に手を置き、全会衆が彼に石を投げて殺すようにしなさい。¹⁵ あなたはイスラエルの子らに告げよ。自分の神をののしる者はだれでも罪責を負う。¹⁶ 主の御名を汚す者は必ず殺されなければならない。全会衆は必ずその人に石を投げて殺さなければならない。寄留者でも、この国に生まれた者でも、御名を汚すなら殺される。

十戒には、主の御名をみだりにとなえてはならない、という命令がありました。それを破っています。その対価は、石打ちの刑です。御名を汚すことは死罪に値するという厳しいものです。なぜ、ここまで厳しいのか？その根拠となる戒めを次に、主は語っておられます。

2B 殺す罪 17-23

¹⁷ 人間を打ち殺す者は必ず殺されなければならない。¹⁸ 動物を打ち殺す者は、いのちにはいのちをもって償わなければならない。

殺してはならない、という戒めを語られています。人のいのちは、創世記9章、ノアの時代、大洪水の後に主が定めておられました。人は神のかたちなのであるから、殺す者は人によって殺されなければいけない、とのことです。人のいのちには、神のかたちという尊厳があります。同じように、動物にも、そのいのちには尊厳があります。動物のいのちに対して、対価を払うなど、その償いをしなければいけません。

¹⁹ 人がその同胞に傷を負わせるなら、その人は自分がしたのと同じようにされなければならない。
²⁰ 骨折には骨折を、目には目を、歯には歯を。人に傷を負わせたのと同じように、自分もそうされなければならない。²¹ 家畜を打ち殺す者は償いをしなければならず、人間を打ち殺す者は殺されなければならない。²² このさばきは、寄留者であれ、この国に生まれた者であれ、あなたがたには同一である。わたしがあなたがたの神、主だからである。」

これは、復讐のおきてではありません。むしろ公正な裁きのものさしです。むしろ、復讐を抑制するための働きもします。自分が骨折されたら、そいつを殺してやれ！ということが、できないようにしています。主の公正は、その人の行ったことに対してふさわしい報いを与えることです(ロマ 2:6 参照)。主は公正な方です。おのおののしたことに応じて、裁きを行われます。

イエス様は、山上の説教で、このおきてを取り上げて、復讐の道具にされていることを知っておられて、むしろ愛によって報いることを教えておられます。「マタ 5:38-42 『目には目を、歯には歯を』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい。あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着も取らせなさい。あなたに一ミリオン行くように強いる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。借りようとする者に背を向けてはいけません。」

²³ モーセがイスラエルの子らに告げたので、彼らはののしった者を宿営の外に連れ出し、彼に石を投げて殺した。こうしてイスラエルの人々は、主がモーセに命じられたとおりに行った。

いのちに対していのちの対価の原則を主は示された後で、それで御名をののしった者が殺されています。これはどういうことでしょうか？そうです、このエジプト人の息子は、主ご自身を殺したも同様のことをしたのです。人はその肉体がありますから、それを損なったら殺人です。しかし、主は霊です。この方に、肉体はありません。しかし、殺すのと同じことは、その御名を罵ることです。聖書では、名は、その人の本質、人格の中心部分を示しています。主なる神を抹殺すべく動こうとする試みは、主の名を冒瀆することなのです。反キリストが終わりの日に何をするかと言えば、主なる神を冒瀆することです。「黙 13:6 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。」

私たちの社会は、物質主義に侵されています。人を殺ささえしなければ、どんな害も与えてもかまわないと考える輩がはびこっています。人は肉体だけで生きているのではありません。尊厳と人格、つまり神のかたちに造られているのです。物質だと思って、何をやってもいいと思っています。誹謗中傷もあれば、暴力や強姦もあるでしょう。主の正しい裁きがあります。キリスト者は、それゆえに、その裁きを求め、かつ、その人が悔い改めて救われるように祈るべきです。